スポーツBiz ワールド

支える1

「健康メニュー」すそ野拡大

約4000社が事務所を構え、約23万人が勤務する世界有数のビジネス街、東京・丸の内。会社員やOLらが行き交う地で、健康食を巡り火花が散っている。

帝国劇場に隣接する国際ビルに2012年、健康機器大手のタニタが「丸の内タニタ食堂」を開店した。税込み830円の日替わり定食、同1100円の週替わり定食ともに、500キロ・カロリー前後で塩分は3グラム以下。健康志向の高まりに乗り、連日行列が引きも切らない盛況ぶりを誇る。近くの職場から昼食に来た川崎市の会社員岡野季沙(きさ)さん(34)は、「スポーツをする時間がなかなか取れないので、健康のため食事には気を使っています」と言う。

東京・丸の内のビルの同じフロアで営業する丸の内タニタ食堂(上)と鹿屋アスリート食堂

タニタ食堂に真っ向から挑んでいるのが、同じフロアで14年にオープンした「鹿屋(かのや)アスリート食堂」だ。

外食企業と鹿児島県の国立鹿屋体育大、鹿屋市との産学官連携による同店は、「アスリートが心掛ける栄養バランスは、一般の人にも通じる食の基本」と、スポーツ栄養学に基づく食事の提供を売りにする。税込み970円で、客はご飯と汁物に加え、野菜や肉、魚など15種類程度の中から主菜(おかず)を3品選べる。カロリーや栄養素は、レシートで子細に確認できる。

丸の内に近い神田錦町の本店では、ロッカーやシャワー施設を備えたランニングステーションを併設し、「皇居ランナー」の利用者も多い鹿屋アスリート食堂に対し、タニタ本社の丹羽隆史執行役員は「お客様の層が少し違う。共存共栄していければ」と冷静に受け止める。実際、消費を牽引(けんいん)する女性層の割合は鹿屋アスリート食堂が5~6割、タニタ食堂は7~8割とやや異なるが、人々の健康支援をターゲットとする戦略は共通している。

体重計などの製造を手がけるタニタにとって、食堂の成功はブランド力を押し上げたと同時に「モノの提供からサービスの提供へと経営の軸足を移す大きな転換点になった」と丹羽氏は言う。企業などからの相次ぐ問い合わせに応じ、14年度から延べ約100の会社や自治体に、健康指導やチェック体制の構築など「健康づくり」を支えるプログラムを提供。1件当たり百数十万円~数千万円の規模のソリューション(課題解決策)事業を新たな収入源に業績の拡大を狙う。

政府の日本再興戦略では、スポーツの周辺にある健康や食などの産業を融合させることで、新市場創出を図る取り組みを掲げている。その先には、医療費など社会保障負担の軽減にも期待が広がっている。

◇

食や医科学、データ分析など選手やスポーツ愛好者らのサポートに商機を見いだす企業が増えている。「支える」編では、様々な角度からスポーツを支援するビジネスを追う。(22面に続く)